I-13

分離派建築会の展覧会にみられる特徴
−展覧会の組織、出展物・展示会場・期間を通じて−
Features seen in the exhibition of the Board of the architectural Bunliha
- Exhibitors & Exhibits throughout the period -

○島矢愛子[2]，　大川三雄[1]
*Aiko Shimaya[2], Mitsuo Ohkawa[1]

Abstract : Exhibition building is considered to be important in to convey the charm of the "architecture", to society. However, at present, except construction, "as Exhibit" columm "[1], research on building exhibition in Japan has not yet been done. As part of the "Study on the characteristics of the building exhibition that focuses on pre-war" conducted in the master's thesis, is positioned as building exhibition first organized by the Architects Association Bunliha[2] (hereinafter referred to in this paper, the Bunliha dealing with the exhibition by). One way to do this is to analyze the important exhibition building exhibition, held from period to determine the layer that you want to discussion about the exhibition visitor, upon exhibition Exhibits (drawings, models, and Perth) and.

１．はじめに

建築展覧会は社会に対し、「建築」の魅力を伝えていく上で重要であると考えられる。戦後、ギャラリー間などの建築・デザイン専門ギャラリーがいくつも運営され、近年では建築展覧会が様々な場所で行われている。また、雑誌『CasaBRUTUS』の登場やイベントも行われていることから、建築に関心をもつ人々がますます増え、建築展覧会が続くことが考えられる。その一方、日本での建築展覧会に関するコラム『展示される「建築」』[1]を除き、研究が行われていない。

本稿では、修士論文において行う“戦前に行われた建築展覧会の特徴に関する研究”の一環として、建築家主催による最初の建築展覧会と位置付けられる[2]分離派建築会（以下、分離派）による展覧会の特徴を明らかにする。方法として、当時の出来事や分離派展覧会に関する記述を押さえながら、出展物（図面、模型、パースなど）、展示にあたり対象とする来客層を判断するのに重要な展示会場、開催期間から建築展覧会を分析する。分離派に関する研究としては論文「分離派建築会とドイツ表現派」[3]、資料では「分離派建築会　宣言と作品」[4]などが出版され、思想・作品に関する研究が行われている。それ以外では、堀口捨己ら個人の言説や作品に焦点を当てた研究がある。

建築展覧会―建築に関する資料（図面、模型など）を展示する展覧会を指し、博覧会のような現物を建設し展示するものとは区別する。また、建築学会主催で行われた展覧会は「建築展覧会」と「」付きで表記する。

２．分離派以前の建築展覧会について

国民美術協会（以下、美術協会）により、建築部として出展し、他部門と並列した形で美術展覧会が行われていた。内容は建築家による作品の図案展示であった。美術協会は建築家中条精一郎が会長を務めていた。会場は第一回が大阪天王寺公園内美術館、第二回より東京：上野公園大正博覧会第一工業館跡、第三回から最後の第十二回まで上野公園竹之台陳列館で行った。[5]

表１　建築展覧会と「建築雑誌」掲載の関連記事 [5] [6] [7]

	できごと	建築雑誌
1877	第1回内国勧業博覧会	
1881	第2回内国勧業博覧会	
1890	第3回内国勧業博覧会	
1895	第4回内国勧業博覧会	
1897		5月号：建築図案描法について
1903	第5回内国勧業博覧会	
1907	東京勧業博覧会	
1910		2月号：学会主催の建築図案展覧会の公開を求む 4月号：アラスカ、ユーコン、太平洋博覧會視察報告(一) 5月号：アラスカ、ユーコン、太平洋博覧會視察報告(二) 9月号：第七回万国建築大会概況（其十三）
1911		6月号：東京勧業展覧会擬賞の結果
1912		1月号：建築製図におけるペン作法（承前完結） 3月号：第九回万国建築大会参列報告 5月号：第二回勧業展覧会建築部合評
1913	第一回国民美術協会展覧会開催	9月号：万国建築博覧会視察報告
1914	大正博覧会開催 第二回国民美術協会展覧会開催	11月号：国民美術協会第二回展覧会
1915		12月号：（建築学会主催）展覧会開催の急務
1920	第三回国民美術協会展覧会開催 「建築新潮」（旧「新住宅」）創刊	9月号：分離派建築会の展覧会を観て

３．分離派建築会の建築展覧会について

分離派は大正９年(1920 年２月１日に東京帝国大学(以下、東大）学生控所で行った展示を機に、活動を始めた。「我々は起つ。」から始まる宣言文で有名な建築運動の団体である。参加者は、初期メンバーに東大卒同期の石本喜久治・堀口捨己・瀧澤眞弓・矢田茂・山田守・森田慶一ら６名。第二回より浜岡周忠、復興創案展覧会（以下、創案展）より創宇社同人の中心となった山口文象[8]、第五回からは大内秀一郎ら分離派以外

１：日大理工・教員・建築　２：日大理工・院（前）・建築

の者が複数が参加している。[9]また、第五回からは公募により作品を募っている。

表 2　分離派建築会展覧会の開催場所・期間[10]

回	場所	期間
習作展	東京帝国大学第二学生控所	大正9年（1920年）2月1日
第一回	日本橋白木屋	大正9年（1920年）7月18日～22日
第二回	日本橋白木屋	大正10年（1921年）10月20日～24日
関西第一回展（石本渡欧送別会）	京都高島屋	大正11年（1922年）5月5日～7日
第三回（堀口大内渡欧送別会）	星製薬	大正12年（1923年）6月30日～7月5日
帝都復興創案展覧会	上野公園竹之台陳列館	大正13年（1924年）4月13日～28日
関西第二回展（石本渡欧送別会）	大阪三越	大正13年（1924年）5月
第四回	銀座松屋	大正13年（1924年）11月1日～7日
第五回	日本橋白木屋	大正15年（1926年）1月27日～31日
第六回	日本橋白木屋	昭和2年（1927年）1月2日～26日
第七回	日本橋三越	昭和3年（1928年）9月16日～20日

分離派は全 11 回の建築展覧会（表 2）に関わり、内 10 回は分離派によるもので 2 回は関西で展示を行った。記述では、堀口が「分離派建築会の作品　第三刊」に記したはしがき[11]に建築設計だけで展覧会を開けるか疑問に思われていて最初の展覧会には余技としての絵画彫刻が並べていた事、第二回から建築のみにした事、復興展では今まで見られなかった建築の団体が参加し建築の展覧会を入場料をとる状態に至っている事を記している。第五回展覧会記事では[12]第五回からの公募制を取り入れたことについて、(会員が参加できなくなってきた事もあるが）自分の力や意志を世間に見てもらおうと思っていても展覧会を開けない建築家の為に行うとして記している。

４．　建築展覧会の分析[10]

４-１．展示物

習作展は、図面とドローイング。第一回からは図面・ドローイングに加え、論考が展示された。第二回では、模型や写真が登場するがいずれも平和記念東京博覧会での実施を前提にした案で、展示を前提に作られた模型・写真ではないと考えられる。関西第一回・第三回・創案展・第四回は、実施に関係なく模型が展示に用いられているが、全ての作品に言えることではない。第五回では、把握できるもの全てで模型を用いた展示が行われている事が分かる。

４-２．開催場所

習作展では東大学生控所、創案展は美術協会企画のため竹之台陳列館。これら２回を除き、星製薬で１回、銀座や日本橋にある呉服屋で複数回行われた。当時、「建築展覧会」が行われることになる建築会館がまだ建てられていなかった。

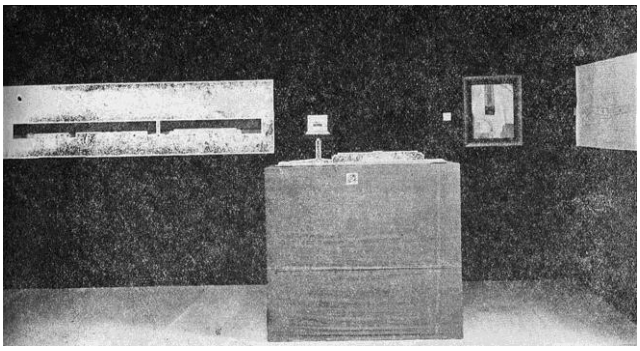

図 1　第二回分離派建築会展覧会の様子

４-３．期間

展示内容と期間は関係していると考えられ、平和博覧会での実施案を展示した第二回は 15 日、復興案を展示した創案展は 16 日であった。

５．　まとめ

2 より美術協会展覧会は国の所有する陳列館で行われ建築家による作品の図案展示である事。3 と 4 より出展物が従来の図面・ドローイングといった平面の表現に模型や写真といった立体感を表現できる展示方法が加わった事や、習作展以降は銀座や日本橋といった繁華街のデパートで展示を行い展覧会について”自分の力や意志を世間に見てもらう”という記述が見られる事から場所は意図的に設定されたと考えられる。

以上の事から、分離派の展覧会の特徴として、建築家主催による初めての建築展覧会であり、初めて公共性の高い立地のデパートで行われた。かつ、展示方法として、模型を用いた展示を初めて行ったと言える。また、分離派の影響により展覧会を行う団体が増加したことは、図案以外による展示手法を示し、建築展覧会の可能性を広げたと考えられる。今後の課題としては、創宇社建築同人・インターナショナル建築会などの建築家による展覧会や建築学会による「建築展覧会」を対象に研究を続ける。

【参考文献】[1]笠原一人：建築雑誌 118(1500), 78, 2003-02-20.[2]筆者により分離派結成以前の「建築雑誌」「新住宅」を調べた結果[3]山口廣：大会学術講演梗概集,計画系 46(計画系), 973-974, 1971-09-20.[4]ゆまに書房：叢書・近代日本のデザイン 25,2009-05-25. [5]国民美術協会編：国民美術協会略史,4-8,1930.[6] 1930 年 9 月号まで「建築雑誌」「建築新潮」に掲載の記事を元に作成.[7]国立国会図書館：1900 年までに開かれた博覧会一覧（年表）を元に作成,http://www.ndl.go.jp/exposition/s1/index.html.[8] 洪洋社 :「建築新潮」,187,1924-11.[9][8],15,1926-3.[10]菊池潤：分離派建築会 http://www.sainet.or.jp/~junkk/bunrihasakuhin(ver2).pdf を参考に[4]や「建築新潮」掲載の記事と照合の上作成.[11][4],236.[12][8],187